

論文の和文要旨

論文題目

現代韓国語の動詞の連体修飾構造に関する研究
—動詞連体形と被修飾名詞の共起様相—

氏名

金民

本論文は現代韓国語の動詞の連体修飾構造に見られる、語彙論的・文法的特徴を明らかにすることを目的として、大量のコーパスを用い、計量的調査及び分析を行った。本稿は現代韓国語の動詞連体形のうち, 하는 (V-는), 한(V-은/ㄴ), 할(V-은/ㄹ)を対象に, とりわけ, ①連体形をとる動詞, ②被修飾名詞, ③被修飾名詞が連体形の表す動作・状態の主体か客体かといった連体節と被修飾名詞との関係に注目した。

本稿で考察した結果は次の通りである：

第2章では, いかなる動詞が連体形をとりやすいのか, そしていかなる名詞が動詞の連体形の被修飾名詞として現れやすいのかについて考察を行った。

まず, 動詞について言うと, 他動詞より自動詞が連体形をとる頻度が高く, 自動詞の中でも, 「状態変化」, 「関係」, 「自然現象」を表す動詞が連体形をとる頻度が高いことがわかった。

※動詞の連体形をとる傾向が強い動詞の例：비다 (空く), 적히다 (書かれる), 우거지다 (茂る), 끓다 (沸く)

次に, 被修飾名詞についていうと, 시늬 (ふり), 예정 (予定), 방도 (方途) のように, 事態や現象を直接・間接的に指示する名詞や, 때 (時), 뒤 (後) のような時間名詞が連体形と共起しやすいことがわかった。動詞の連体形との共起頻度が高い名詞は, 修飾語なしに文の成分として用いられにくい特性を持ち, 不完全名詞的な性格が濃いものが多い。

※動詞の連体形の被修飾名詞として現れる傾向が強い名詞の例：예정 (予定), 때 (時), 뒤 (後), 경향 (傾向), 까닭 (わけ)

そして連体節と被修飾名詞の関係については, 寺村秀夫(1980)に倣い, 大きく「内の関係」と「外の関係」に分類した：

「内の関係」：被修飾名詞が連体節内部の一成分になるような構造 (または, 被修飾名詞が連体節の述語動詞と格関係にある連体修飾構造)

「外の関係」：被修飾名詞が連体節内部の一成分にならないような構造 (または, 被修飾名詞が連体節の述語動詞と格関係にない連体修飾構造)

「内の関係」は被修飾名詞が連体節で示される動作・状態に対して, 何を表しているかによって, 大きく8種類の関係を提示した。뒤 (後), 한편 (一方) のような名詞は「内の関係」として現れないなど, 名詞は一般に連体節との関係において偏りを見せることがわかった。

「外の関係」はさらに, 連体節が表す事柄と被修飾名詞が表す対象が同一の事柄を示す<同

一内容関係>と、連体節が表す事柄と被修飾名詞が表す対象が同一の事柄を示さず、被修飾名詞が連体節の表す事柄の原因、方法などの状況を表す<状況的内容関係>に分類した。<同一内容関係>構造の被修飾名詞には事態や現象を直接・間接的に指示する<事柄名詞>が来ることが多く, 하는, 한, 할の中でも하는がこの構造を実現する傾向が強い。

<状況的内容関係>は連体節との繋がりによって被修飾名詞が表す意味によって分類され, 例えば, 被修飾名詞Nが「…するだけのN」のように解釈される構造は할の構造的特徴であるなど, <状況的内容関係>の種類と連体形との間にも一定の関連性が認められる。

次に, 連体形をとる様相から, 本稿における名詞分類と動詞分類を行った。

まず, 名詞を大きく, <実体>, <場所>, <時間>, <事柄>, <状態>, <抽象>に分類した。これらの名詞のうち, <実体>, <場所>, <時間>, <抽象>は連体節と主に「内の関係」で現われ, <事柄>と<状態>は連体節と主に「外の関係」として現われる特徴が見られた。このような現象から, 連体修飾構造の色々な型は, 被修飾名詞の語彙的特徴と緊密に結びついていることがわかる。

次に動詞についていうと, 本稿では動詞をテンス・アスペクト的な特徴からいくつかの種類に分類した。主に, 時間の中での展開性, 継続性, 限界性などに注目した。<動作継続動詞>は「하고 있다」をとり, 単一主体の単一動作の「動作継続」を表す動詞である。

<結果継続動詞>は「하고 있다」をとり, 単一主体の単一動作の「動作継続」を表すとともに, 한을とり, 主体や客体の現在の状態を表す動詞である。

<状態変化動詞>は「하고 있다」をとり, 単一主体の単一動作の「動作継続」を表すことができない動詞である。この動詞が「하고 있다」をとると, 複数主体の動作を表す場合が多い。한을とると, 「現在の状態」を表す。

一方, 連体形をとる動詞には「生起~終了」の局面がはっきりしない, <内的認知動詞>がある。보이다 (見える) は前に-처럼などの副詞的な要素を従えて, 「これこれのように見える」という意味で用いられるときは, 継続性も限界性も持たない。

次に時間の中での展開性がない動詞には<関係規定動詞>と<属性動詞>がある。

まず, <関係規定動詞>は具体的な時間の中で現象する事柄ではない, 関係や概念を表す動詞である。一般に「하고 있다」をとりことができず, 하는をとる傾向が強い。

<属性動詞>は具体的な時間の中で現象する事柄ではない, 属性を表す動詞である。一般に한을とり, 主体の現在の状態を表す。

第3章では, 하는連体修飾構造に見られる語彙論的・文法的特徴を明らかにするために, 하는をとる頻度の高い動詞と被修飾名詞を抽出し, それらが하는構造でいかに現われ, いかに하는の意味と関連しているのかについて考察した。その結果, 하는, 한, 할のうち, 하는をとる頻度がもっとも高い動詞(=<하는志向動詞>)には, 次のような種類の動詞が見られた:

<動作継続動詞>: 떨리다 (震える), 끓다 (沸く) など

<内的認知動詞>: 보이다 (見える), 마음에 들다 (気に入る) など

<関係規定動詞>: 달하다 (達する), 맞먹다 (匹敵する) など

<하는志向動詞>は具体的な動作を表す場合も, 抽象的な動作を表す場合も, 動詞の語彙的意味の中に「運動が必然的に尽きる内的時間的限界」という意味特徴をとりだすことができない<非内的限界動詞>(atelic verb)であるという特徴がある。このような하는をとる動詞における偏りから, 하는についてはテンスの観点からの規定のみならず, 「未完了」「動作」といった意味の規定が必要であることがわかる。

次に하는, 한, 할のうち하는との共起頻度もっとも高い被修飾名詞(=＜하는志向名詞＞)について調査した結果, 하는と高い頻度で共起する名詞も하는の表す意味と関連する名詞が特徴的に現われた. 例えば, 소리(音)は「行われつつある行為」と関連し, 습관(習慣), 경향(傾向)は「反復的に行われる行為」と関連する. そして개념(概念)は「恒常的・一般的事柄」と関連する名詞である. その他, 방법(方法), 구조(仕組み), 특성(特性), 이치(道理)などは繰り返されることにより, 一般化した事柄を表し, 「一般性」を持つ名詞として規定しうる.

まず, 하는「内の関係」(意味的格関係)についていうと, 「一定時間継続する動作」や「脱時間的な関係概念」を表す＜하는志向動詞＞が典型的に現れた. 被修飾名詞は하는に対して「主体」を表す場合がもっとも多いことを確認した. そして하는「内の関係」の하는の意味に注目すると, 動詞が「心理」を表す動詞(기뻐하다(喜ぶ))や「知覚」を表す動詞(보이다(見える))である場合, 하는は「現在継続」を表し, 動詞が＜関係規定動詞＞, ＜結果継続動詞＞, ＜状態変化動詞＞である場合, 하는は「超時」を表す傾向が強いことを確認した.

※하는「内の関係」の例: 내리는 비 (降り注ぐ雨), 지나가는 자동차 (通りかかる車), 교육의 영역에서 학교교육이 차지하는 비중 (教育の分野での学校教育が占める割合), 한 편의 글을 이루는 요소들 (一つの文を構成する要素)

次に하는「外の関係」(内容補充的関係)では, ＜動作継続動詞＞と次のような名詞が典型的に現われた:

- <行為>: 시늬(ふり), 작업(作業)など
 - <様子>: 기색(顔色), 눈치(様子)など
 - <方法>: 방식(方式), 방법(方法)など
 - <現象>: 소리(音), 냄새(匂い)など
 - <感覚・感情>: 느낌(感じ), 재미(楽しみ)など
 - <過程>: 과정(過程), 절차(手続き)など
 - <状況>: 실정(実情), 상황(状況)など
 - <仕組み>: 구조(構造), 제도(制度)など
 - <特性>: 장점(長点), 이점(利点)など
- ...

上の名詞のうち, ＜行為＞＜様子＞＜状況＞＜仕組み＞＜特性＞は하는と主に＜同一内容関係＞で現われる特徴がある.

※하는＜同一内容関係＞の例: 걷는 모습 (歩く姿), 핸들 돌리는 시늬 (ハンドルを回すふり)

そして＜現象＞, ＜過程＞などは, 하는と主に＜状況的内容関係＞で現われる特徴があった. また＜感覚＞, ＜方法＞は하는と＜同一内容関係＞としても＜状況的内容関係＞としても現われる特徴があることを確認した.

※하는＜状況的内容関係＞の例: 돈 버는 재미 (お金を稼ぐ楽しみ), 문 여는 소리 (ドアを開ける音)

하는は＜行為＞, ＜様子＞, ＜方法＞など, 様々な＜事柄名詞＞と「外の関係」で現われることで, 被修飾名詞が表す行為や現象が具体的にどのようなことを表すのかを補充する働きをする. 하는が「終わっていない事柄」, つまり「動作や現象」を表すため, ＜行為＞, ＜様子＞, ＜方法＞など, 様々な＜事柄名詞＞の内容を補充することが可能であると思われる

る。

하늘が表す意味については、例えば、被修飾名詞が소리 (音), 기적 (気配), 시늉 (ふり) であると, 하늘は「現在継続」を表す傾向が強く, 被修飾名詞가 방법 (方法), 작업 (作業), 머릿 (癖) であると, 하늘は「超時」を表す傾向が強いことがわかった。「外の関係」において하늘の表す意味が被修飾名詞によって決まるという現象から, 連体節の「時」が上位節の「時」や発話時から独立して決まる場合があることを確認した。

第4章では, 한をとりやすい動詞と被修飾名詞を抽出し, 하늘と同様の分析を行った。

まず, 한をとる動詞についていうと, 하늘, 한, 할のうち, 한をとる頻度がもっとも高い動詞 (= <한志向動詞>) には, 次のような種類の動詞が見られた:

- <状態変化動詞> : 지치다 (疲れる), 잃다 (無くす)
- <結果継続動詞> : 접다 (折る), 입다 (着る)
- <属性動詞> : 헐벗다 (ぼろを着る), 돼먹다 (できている)

<한志向動詞>は動作の過程を表すか否かに関係なく, 「運動が必然的に尽きる内的時間的限界」という意味特徴をとりだすことのできる<内的限界動詞> (telic verb) である特徴を持っている。動詞の自他の観点からいうと, 自動詞の中では<受動動詞>が多く, 他動詞には客体に働きかけ, 客体に変化をもたらすような他動詞が多い。これらの動詞は한をとることで新しい状態の発生を表す特徴がある。한をとる動詞の様相から한の意味を考えると, 한は動詞の表す動作が終わっていることを表すことで, 形容詞の한とともに主体の状態 (静態的な側面) を表すようになると考えられる。

まず, 한「内の関係」についていうと, 한「内の関係」では, 主に<結果継続動詞><状態変化動詞>などの<한志向動詞>が典型的に現れ, 被修飾名詞は한に対して主に「主体」「客体」「動作の結果が存在する場所」を表す。한の場合は「완성된 작품」(完成した作品) (→작품이 완성되다) (作品が完成される) のように, 連体節と被修飾名詞が「受動的な動作と主体」という関係にある場合が多い。被修飾名詞としては具体的な名詞を表す名詞がこの構造で現れやすい。

次に, 한「内の関係」における한が表す意味は한をとる動詞と強い関連性を持つ。動詞が<結果継続動詞> (입다 (着る)) や<状態変化動詞> (다치다 (怪我をする)) であると, 한は「完了」や「現在の状態」を表す傾向が強い。それに対し, <動作継続動詞>や<内的認知動詞>が한をとると, 한は「過去」または「完了」を表す傾向が強い。

※ 한「内の関係」の例: 바위로 이루어진 도시 (岩でできた都市), 웅크린 몸 (ぎゅっと身をすくめた体)

次に한「外の関係」についていうと, 「外の関係」を実現する<한志向名詞>には, 기억 (記憶), 혐의 (嫌疑) のような「既に終わった事柄を前提に何かをいう」という性質である「完了性」を持っている名詞が多い。そして時間的に「後」を表す名詞も多く見られる。혐의 (嫌疑), 죄 (罪), 역사 (歴史) などは한と<同一内容関係>で現われる特徴があった。

※ 한<同一内容関係>の例: 뇌물을 받은 혐의 (賄賂を受け取った嫌疑), 집을 나간 죄 (家を出た罪)

한は흔적 (痕跡), 상처 (負傷), 배경 (背景), 결과 (結果) など, 動作の結果を表すような名詞と主に<状況的内容関係>で現われる特徴が見られた。被修飾名詞Nは한との繋がりで, 「…した後のN」のように解釈される。

※ 한<状況的内容関係>の例: 꾸미고 가꾼 흔적 (飾ったり, 手入れをした痕跡), 열심히

노력한 결과 (一生懸命努力した結果)

「外の関係」の構造における한をとる動詞には全体的に<内的限界動詞>が多いが、「内の関係」の構造より、偏りが激しくはない。動詞における偏りは、動詞と被修飾名詞の結びつきが強い「内の関係」において著しいと考えられる。

한の意味については、被修飾名詞が기억(記憶)であると、한は「過去の経験」を表すなど、한の意味が被修飾名詞と関連性を持つことがわかった。하는の場合と同様に、한「外の関係」においても、한の意味の実現に被修飾名詞が重要な役割を果たすということがわかる。

第5章では、할による連体修飾構造について分析・考察を行った。할は用例のほとんどが「外の関係」の構造で現れ、上位節に있다(ある), 없다(ない), -이다(だ)のような形式的な用言が後続し、全体が固定された一種の文型を形成する傾向が見られた。

まず、動詞についていえば、살펴보다(注意して見る), 「考える」の意의보다, 주목하다(注目する)のような「思考」を表す動詞や, 「~의 오른쪽에 나설 작품이 없다」(…の右に出る作品はない)の「오른쪽에 나서다」(右に出る)のような、比較に基づいた話し手の判断を表す動詞も見られた。例えば, 살펴보다(注意して見る)は話し手がある物事に対する理解のために意図的に行う思考行為であり, 상상하다(想像する)より主体の意図が強く感じられる特徴がある。既存の研究で할は「非現実」「未実現」「未来」のように規定されてきたが, <할志向動詞>の様相から, 할は「話し手が自らの意図を込めたいときに選択的に用いる形式」としての性格も持っているということがわかる。

次に、被修飾名詞についていうと、할の被修飾名詞として現れやすい名詞は、抽象的であり、「ある未然の事柄について何事かをいう」という「未然性」を共通に持っている。

まず、할「内の関係」では、할をとる動詞が<意志動詞>か否かによって할の実現する意味が異なる傾向が見られた。할をとる動詞が<意志動詞>であれば、할は文脈によって「意志」「可能」「予定」などの多様な意味を表すのに対し、할をとる動詞が<無意志動詞>である場合は、할が「可能性」「可能」「予定」を表し、「意志」や「当為」は表しにくいことがわかった。

할と被修飾名詞の関係に注目すると、被修飾名詞が할の表す動作に対し、「客体」を表す場合が多い。

次に、할「外の関係」では、被修飾名詞が何かによって할の実現する意味が異なる傾向が見られた。例えば、被修飾名詞가생각(つもり), 궁리(考え)などの「思考」を表す名詞であれば、할を「意志」を表し、할をとる動詞も基本的に<意志動詞>である特徴があった。さらに、할の用例を「存在しない」または「程度が低い」などの否定的な表現との共起という観点から考察した。その結果、被修飾名詞によって、否定的な表現が後続しやすい場合と、肯定的な表現が後続しやすい場合があることが確認された。

第6章では、本稿の結論と課題について述べた。

하는, 한, 할がそれぞれ固有の構造的特徴を有することを明らかにすることにより, 하는, 한, 할が対等な3項対立ではないことを示した。

まず, 하는と한についていうと, 하는構造は「뛰는 아이」(踊っている子供)で見られるような<非内的限界動詞>が多い割合を占め, 한構造は「몸에 걸친 옷」(体にかけた服)で見られるような<内的限界動詞>が多い割合を占めている傾向が見られた。<非内的限界動詞>は動作が必然的に尽きる限界がないため、「動作」を表すのに用いられやすいし, <内的限界動詞>は動作が必然的に尽きる限界があるため, その限界を乗り越えた「状態」を表すのに用いられやすいと考えられる。하는と한は「現在」「過去」といったテンス

的機能を有するよう言われてきたが、それだけの規定では不十分であり，하는は被修飾名詞の動態的な側面を規定し，한は被修飾名詞の静態的な側面を規定するという機能を持っていると見ることができる。

次に，할についていうと，既存の研究において할は「推測」，「非現実」，「未実現」を表す形式と呼ばれてきたが，本稿の用例分析によると，現実の事柄でも話し手が「強調」や「非難」などの意図を込めて言うときに，할を用いることが確認された。（例：「세계 1위를 할 정도로」（世界1位になるくらい））

結局，하는と한は事柄を既存の事実として客観的な態度で述べる形式である点において，할とムード的に対立しているし，하는と한は局面を分かち境界を越えているかどうかで，アスペクト的に対立していると見ることができる。

連体形語尾の認定については-ㄴ，-는，-ㄴ의 3 者を認める立場と，-ㄴと-ㄴのみを認め，-는は-ㄴ-ㄴ이가結合したと見る立場がある。本稿の考察の結果から考えると，連体形語尾は「已然」なのか「未然」なのか，あるいは「客観的な態度」なのか「主観的な態度」なのかで一次的に-ㄴと-ㄴを認め，-는は-ㄴ-ㄴ의の複合形式であると考えうる。-ㄴは「静態性」を表し，-는は-ㄴ-ㄴ이が結合し，「動態性」を表すようになるのである。